

<会員のひろば>

任意の団体から企業組合へ

小池 喜和三 (東京都/企業組合らい雷設計コープ代表理事)

「皆で力を合わせて、新しい設計組織をつくろう」と労働組合の仲間と声を掛け合い、仕事を受注し始めたのが1982年でした。あれから10年経ち、昨年10月に企業組合法人として改めてスタートすることになりました。

遅々とした歩みですが、やっと次のステップを迎え、実質的に設計組織として社会に根を張るスタートをきることができたところです。

準備期間の10年間に建物設計・監理13件、相談業務20件以上を行ってきたわけですが、この期間の取り組みは決して仕事量としては多くなく、なんとか続けてきたのがやっとだった気がします。しかし無駄な時間ばかりが過ぎたわけではなく、有意義な経験も多くあり、今回はそのあたりを振り返ってみたいと思います。

設計組織（ここでは建築設計・監理、都市計画の一部、建物補修等の業務を言う）の特徴は基本的に技術者1人単位で仕事を進めていることです。大規模な組織でも、管理職のもとに1人の技術者と実施設計等の補佐として何名か若い技術者が付いているのが普通です。そのため独立期を迎えた技術者の仲間が集まって何かしようということになっても、どうしても共同受注と仕事の振り分けという傾向になりがちです。私達の見近などころでも何人かの技術者が一般企業としての設計組織をつくり、また一部には人を増やし中規模化へという例はたくさん目にしますが、個人個人の独立性と協同した仕事の両立というのはあまり見当たりません。ですから私達が進めてきた、それぞれの技術者の仕事の領域、内容、進め方等を生かしながら、一方では、仕事の共同受注、共同設計及びアフターケアへの共同責任を持つといったスタイルはあまりないようです。ここのところの難しさを払拭できず模索を続けてきたというのが、こんなに長い期間牛歩のごとく進んできた一

番の要因ではないかと思えます。

経済基盤の違う、それぞれの設計者が、さらに「協同組織に身を置く」というのは何よりも構成するメンバー各自のしっかりした意識と身を粉にする努力がないと続きません。企業組合法人をつくる経過においてはやはりそのあたりの姿勢が問題となり、多数の人達は個人的な組織を選んだというのが実情です。企業組合の法人化は最低4人以上ということで、10数人いたメンバー数から見れば4人ぐらいいは集まるだろうと思っていたのですが、その4人のメンバーの構成にも苦労しました。

個々の設計者が身を置く個人組織の将来性と協同で進める設計組織の展望とが、うまく合致しないと活力が生まれてきません。そこで今後の企業組合の運営については次のような点を重点に行っていきたいと考えています。

- ・営業活動といった狭い範囲にとらわれず、様々な分野の人達との対話や交流を活発に行う。
- ・公共事業の質の向上や発注制度の改善を意識的に行う。
- ・若い力が企業組合員に加わるように系統的に努力する。
- ・各企業組合員の企業組合業務（協同的な業務）の比重を高くする。

今までは大変ゆっくりした歩みでしたが、今後は少しピッチを上げ張り切っていこうと皆で話しています。

今年7月には私達のスタートを大きく社会に広めるためにも、オープンセレモニーを建設一般東京都本部の門仲天井ホールで開催する予定です。ここは、私達（任意団体時）の内装設計によるホールでもあり、思い出深い所です。協同総研の菅野氏、手島氏他多勢の人達に出席していただけたらと思っています。